

平成二十九年、私が大本山永平寺で修行を始めた年のでき事です。永平寺に「僧堂」という修行僧が坐禅をしたり、食事をしたり、夜に睡眠を取ったりするお堂があります。そこに修行僧が集まって、朝の食事をいただく時の事です。修行僧は、「応量器」という食事をいただく時に使う食器を持っています。

永平寺での修行が始まり半年が過ぎた頃、私はその応量器を扱う作法にも慣れてきた事から、お腹いっぱいお粥が食べたくなりました。僧堂でいただく食事の量は、自分で決めます。給仕をしてくださる修行僧に器を差し出して、合図を送ることでいただく量を決める作法になっています。私は器いっぱいにお粥がよそわれたところで、合図を送りました。その結果私のお腹は満たされ、食事を楽しむことが出来ました。

しかし、食事を終えて僧堂を出ると、古参和尚さんに呼び止められ、注意されました。「不相応な量を食べきろうとする様子は、貪りの表れだ。貪っているから、作法通りに食べていても食事に対する感謝の気持ちがない。木桶にある限られた量のお粥を多く食べることで、その分食べられない人がいることを考えないのか？」と厳しいご指導をいただきました。私は自分の行いを恥じました。作法に慣れて多く食べられるようになったことをひけらかすために、お腹いっぱいになりたいために、必要以上に多く食べていたことに気付いたのです。そして貪りの心が、食事への感謝の気持ち^{くちやく}を奪っていたことに気付かされました。

永平寺の境内に「杓底一残水汲流千億人」と刻まれた石柱があります。この言葉の意味は、柄杓の底に残ったわずかな水でも、元の川に戻せば、多くの人々へその恩恵が行き渡るといふものです。この言葉は、昭和の中頃に、永平寺の貫首、熊沢泰禅^{くまざわたいぜん}禅師によって詠まれました。川から柄杓で汲んだ水を必要な分だけ使って残りを元の川の流れに戻す、道元禅師の故事を詠んだものです。木桶の中のお粥も、川に流れる水も、同じように限りある資源であり、柄杓の底に残った汲み水は、共に生きる多くの人々が使うことができる貴重なものなのです。

大事なのは、自分が生かされていること、他の生命と共に生きていくことを感じることに大切さです。私たちは、他者と分かち合い、感謝の気持ちを忘れず、貪りの心を抑えるよう努力しなければなりません。